【コラム　小屋館城跡の今昔】

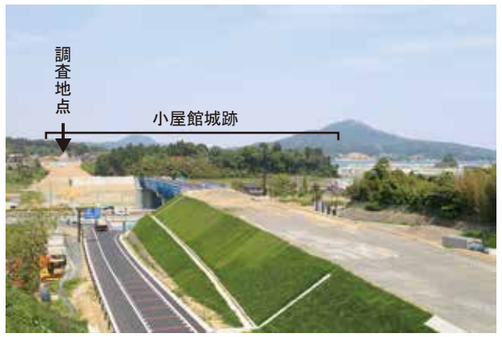
小屋館城跡の調査で見つかった堀１・２の長さを合わせると、200m 以上に及びます。これらの堀を築いた際に出た土は、堀に沿って土手状に高く積み上げると「土塁（どるい）」となり、さらに防御を固めることができますが、今回の調査では土塁は確認されていません。小屋館城跡は、江戸時代以降になると宅地や畑地、墓地などとして利用されるようになるため、土塁は平らに削られてしまったのかもしれません。堀は長らく窪地として残っていましたが、戦後の宅地造成によって完全に埋められ、発掘調査する前にはほぼ平らな状態でした。

発掘調査では、重機と人力を使って堀を埋めた土を掘り進めますが、中世の人たちは固い岩山をすべて人力で、鋤（すき）や鍬（くわ）などを使って掘り上げました。気仙沼にはこうしてつくられた城跡が各所に点在しており（図５）、当時の緊迫した社会情勢を物語っています。なお、これらの城は、主に戦いなどの非常時に立てこもるためのものであることから、当時の人たちが日常的に使っていた焼き物などが出土することは少なく、今回の調査でも見つかっていません。

さて、この発掘調査が終わると、２条の堀があった場所と重なるように、丘陵を切通して三陸沿岸道路が建設されます。この場所に小屋館城跡の堀があったことを、地域の歴史として長く語り継いでいただければ幸いです。

調査開始前　平坦な宅地でした

調査の様子　堀が徐々に姿を現します



三陸沿岸道路と小屋館城跡

図５　気仙沼市域の城館跡

平成30年7月21 日（土）10:30～12:00

気仙沼市

小屋館城跡（こやだてじょうあと）

現地説明会資料
宮城県教育委員会

調査要項

遺跡名　：小屋館城跡（宮城県遺跡登録番号：59049）
所在地　：気仙沼市松崎中瀬
調査原因：三陸沿岸道路建設事業
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財課
調査協力：国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所
　　気仙沼市教育委員会
　　古谷館八幡神社
調査面積：約1,700㎡（調査対象面積：約2,000㎡）
調査期間：平成30年4月23日～7月末日（予定）

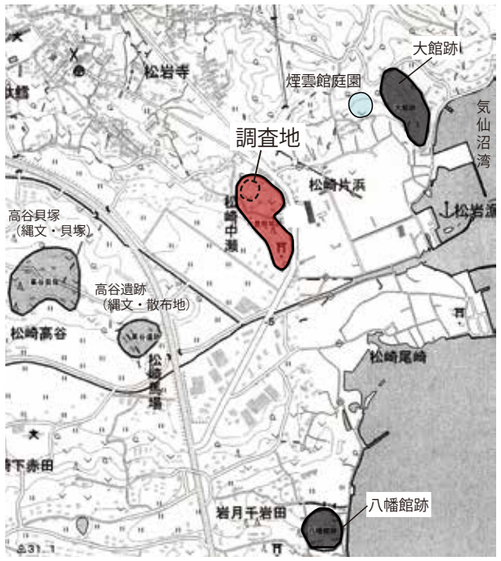


図1　小屋館城跡と周辺の遺跡

１．小屋館城跡の調査

宮城県教育員会では、三陸沿岸道路の建設に伴い、小屋館城跡の発掘調査を実施しています。工事計画に沿って道路の通る範囲を3ヵ年にわたって調査しており、今年度が最終年度になります。これまでの調査では城跡の北側を区画・防御する堀跡が2条見つかっています。今回の調査では、その南端部分を確認し、これまでの調査と合わせて、堀の位置と規模の全容が明らかになりました。

２．小屋館城跡の地理と歴史

小屋館城跡は、気仙沼市松崎中瀬（まつざきなかせ）に所在する城跡です。北西から南東に向かって延びる丘陵尾根上の南端、標高20m前後に立地し、平野との比高は16～20mあります。城跡は、東から入る沢によって、古谷館八幡神社の鎮座する南側と、今回調査した北側の大きく二つに分かれます。城跡南側では、西と北は室根山をはじめとする北上山地の山々、東と南は気仙沼湾と大島を一望できます。

小屋館城跡は、鎌倉時代後半から安土桃山時代まで気仙沼周辺を治めた熊谷（くまがい）氏の一族が築城、城主を務めた城であることが、今に伝わる文書から推定できます。「大椚家系図（おおくぬぎけけいず）」には、赤岩城熊谷直時（なおとき）の兄弟直定（なおさだ）（14世紀前半頃）が「松崎村舘主元祖」、「沖家熊谷氏系図」には、直時の弟直景（なおかげ）（14世紀前半頃）が「松崎の村主」とあります。また、『仙台領古城書上（せんだいりょうこじょうかきあげ）』には城主として熊谷左京進（くまがいさきょうのしん）が記されています。

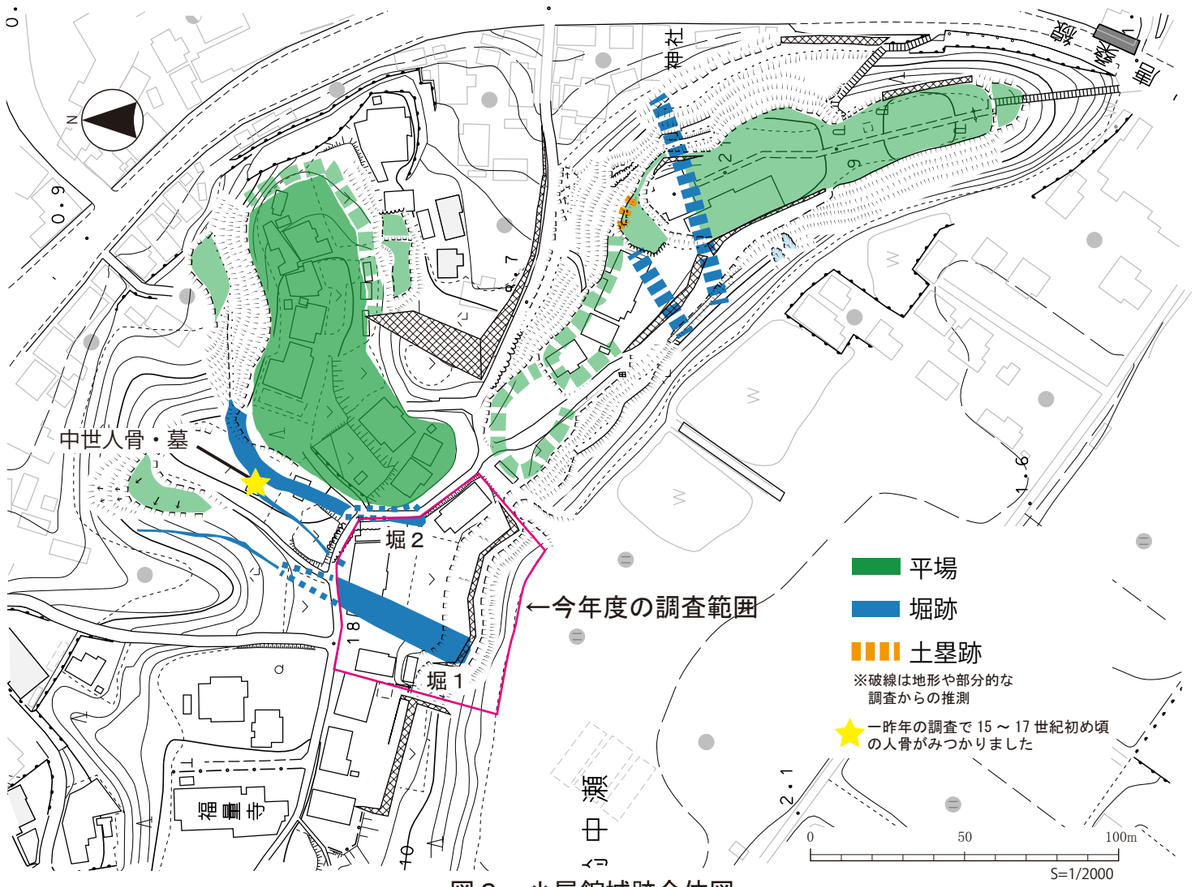


図２　小屋館城跡全体図

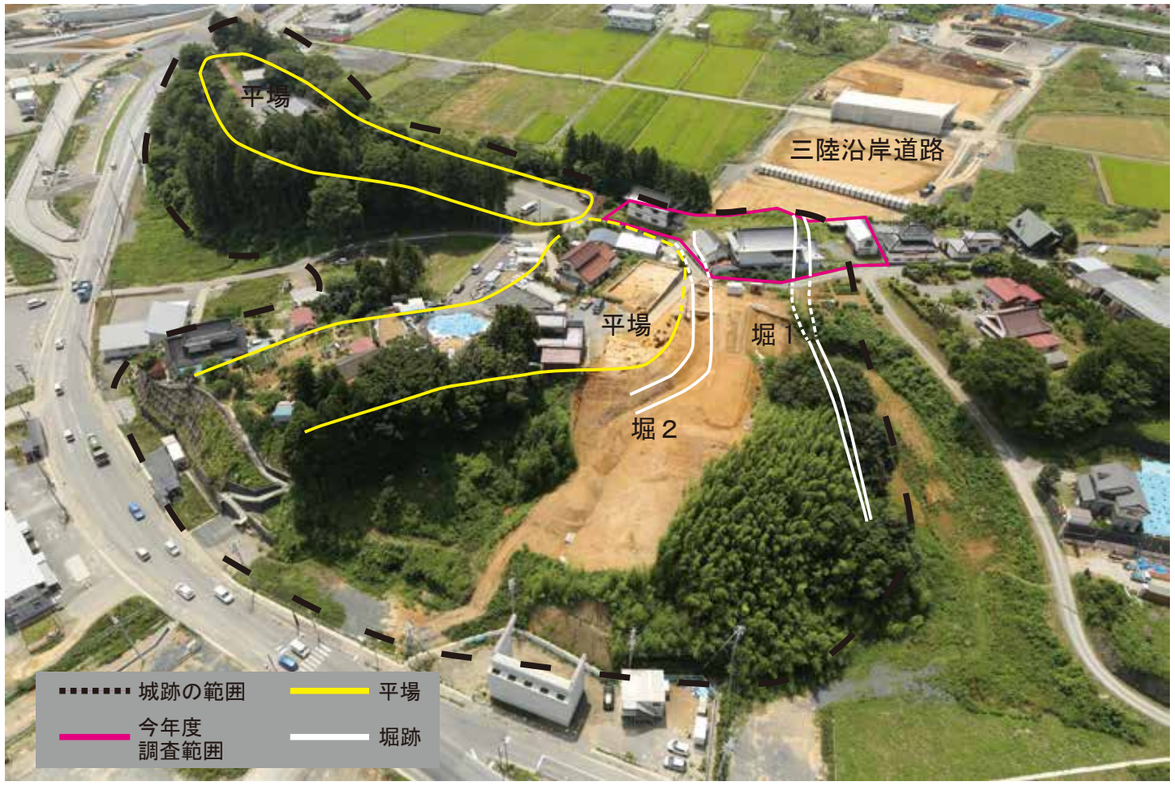


図３　小屋館城跡航空写真　北東から撮影（２０１７年８月３日撮影）

３．調査成果

これまでの調査で２条の堀切（空堀）がみつかっています。城跡北側の平場に接して堀２、その外側に堀１があります。これらの堀によって、城が内と外に分けられています。今回の調査では、それらの南端部分を確認しました。

【堀１】

規模は、上幅７～９m、深さ２～４m、断面形は開いたＶ字状をしています(右写真)。長さ約40m分を確認しました。これまでの調査と合わせると長さ 120m以上になります。

堀１の断面

【堀２】

南端部分の一部を確認しました。これまでの調査結果を合わせみると、堀の規模は長さ 80m以上、上幅約 5m、深さ 1.5 ～ 2m、断面形は開いたＶ字状をしています。

４．まとめ

これらの調査から、城跡北側の構造の大部分が明らかになりました。調査した堀は、どちらも丘陵の南北両側から入り込む沢を繋いでおり、自然地形を巧みに利用してつくられています。平野に突き出た丘陵の南端部分に築城された小屋館城跡は、三方が急な斜面で、敵の侵入は簡単ではなかったことでしょう。一方、城跡の北側は、西側に続く丘陵尾根を横断する深い２条の堀切を設けることで、平場と尾根を分断しています。以上から、堀１・２は、城を内と外に分けるとともに、尾根伝いに侵入する敵に対する防御を意図してつくられたと考えられます。また、堀１が城跡の端に位置するとみられることから、城は幅約 20 ～ 40mの尾根上に、南北約 350m にわたってつくられていたことが分かりました。

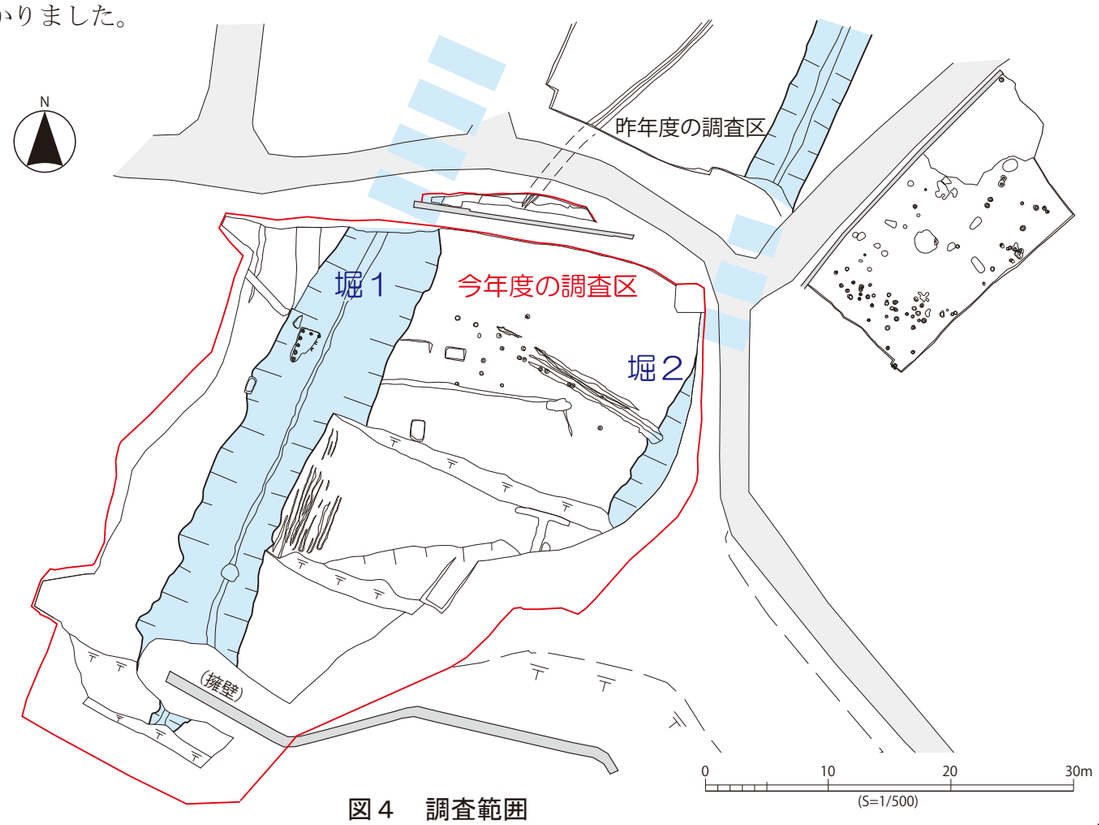


図４　調査範囲